



文部科学省  
IB教育推進コンソーシアム

## TEACHER TESTIMONIAL



### 佐々木法子氏(ぐんま国際アカデミー)

ぐんま国際アカデミー中高等部に赴任し、IB教育に関わり4年。  
MYP数学(日本語)、DP数学(英語)を担当。

「IB教育は「エリート教育ではない」ということを一番伝えたい」

#### IBは基礎学力を前提とした上での スキルの獲得を目標にした教育

私は高校時代をアメリカで過ごしました。当時からIBについては知っていましたが、どちらかというとヨーロッパの教育という印象でした。(実際はそんなことはなかったと思いますが。)教えるようになるまで、特にIBについて興味があったわけではないのですが、学校長が本校でのMYP導入を決め、IB教育に携わるようになってから、あまり抵抗はなく淡々と取り組んでいます。本校の教員は、教育学部卒業の先生はそこまで多くなく、研究職の出身だったり、外国籍の先生も多かったです。それぞれが明確なビジョンを持っています。そして、その教員方をMYPコーディネーター・DPコーディネーターが、強力なリーダーシップをもって、同じ方向に向かって進めるように日々取り組んでいます。IBはミッションステートメントによって、達成すべき目的が明確ですし、学力だけではなくスキルやコミュニティ参加を通じて学びに向かう人間性などを構造的に学習するので、どんな子供でも身に付けることができる教育だと思います。日本の教育との共通点としては、基礎学力(知識・技能)を重視している印象があり、保護者からは「IBをやると学力が低くなってしまわないか」という質問を受けることもありますが、IBはそれらの基礎学力を担保した上のスキルの獲得を目標にした教育であって、基礎学力が低くなるということはないと思っています。

IB教育を通して数学を好きになる国際的な調査では、日本の子供たちが「数学が好きではない」と回答する割

合が国際平均に対して有意に高いという結果が出ています。私も大学で数学を学びましたが、生徒が40人ほどいる中で、女子学生はたった2人でした。親からも「数学科に進むのはやめた方がいいんじゃない?」と言われたこともあります。でも海外では、数学の専門家が金融工学の道に進んでいたり、就職上の選択肢も多かったです。数学者の社会的地位は日本に比べて高いです。自分も数学を教える立場の者として、教え子には、数学の面白さや生活の中での数学の生かし方などを知ってもらいたいし、数学を好きになって欲しいと思って授業をやっています。

IBではテクノロジー(グラフを描くツールや関数電卓など)を積極的に活用することを推奨しています。技術を活用することによって“数学”の概念を拡張できます。つまり、今までは“教科書のお手本通り決められたグリッドにグラフを描く”ことが“数学”だったけれど、IBでは技術を活用してグラフを描くことも“数学”に含めましょう、ということにする。そうすると生徒が数学でできることがすごく広がります。普段ならグラフを描くのに時間がかかる生徒であっても実生活の現象をすばやくグラフで見える化できたりして、できることが増えると思います。出来ることが増えることは楽しさに繋がり、自己肯定感も高まります。

また、数学が単なる知識の集合体や、単なるアルゴリズム(手順)の塊になってしまわないように意識しながら授業をしています。例えば日本の教科書では、方程式と関数がしっかり章分けされていて、「方程式」の章では方程式が解けるようにする、「関数」の章ではグラフが描けるようにする、というようにそれぞれが個別の知識と

して分けて記載されています。ただ、実際は2つは全然別のものでなく“方程式はグラフの一部”であるのですが、そのつながりが見えにくくなってしまっています。方程式と関数を行き来できるようになることによって、本当にそれらが何を意味するのかその概念を理解してほしいと考えています。単なる“手順の塊”を意味もわからず延々と覚えさせられるって結構苦痛だと思いますし、そんな知識は生徒はすぐ忘れてしまうので、それらの意義もしくは概念を獲得してほしいと思っています。MYPは概念理解を重視しているので、私の考えとすごく相性がいいなと思います。

### ミッションステートメントに合う人に育てるのがIB教育の本質で、誰しもが平等に受けられる

IB教育が、「エリート教育ではない」ということを一番伝えたいです。そもそもIBは、ステートメントを達成するために作られたプログラムですので、こういう子が向いている、向いていない、というのはありません。最初からその能力を持っていなくても、それを身につけていくプログラム構成になっていると思います。たしかにDPからスタートする場合、MYPで培ったスキルを使っていきますし、時間的な制約の面もあり非常にハードです。しかし、MYPからスタート、またはPYPからスタートする子の場合、どんな子でも、という前提で関わってこそそのIB教育だと強く思います。誰しもが平等にIB教育を受け、ミッションステートメントに合う人に育てていくのが本来あるべきIB教育の姿だと思います。

周りを巻き込んで課題解決する力や、コミュニケーションによってアイデアを広げる力、メタ認知能力などのスキルを生かして、ウェルビーイングを高めてほしい

卓越した才能のある子はどこにいても成果を発揮すると思いますし、すごい発見もすると思います。ただ、IB教育はそうでない子や、勉強に対して苦手意識がある子も、自分ごととして課題解決したり、意見したりできるようになります。コミュニティプロジェクトなどで養われる周りを巻き込んで課題解決する力や、コミュニケーションによってアイデアを広げる力、メタ認知能力な

どは日本の企業や社会でも必要とされています。そういったスキルを活かしてウェルビーイングを高めてほしいと思います。

### 自分自身の生活の中で答えのない問いを立てられる人がIB教育者に向いている

私は元々IB教育に興味があったわけではなく、数学が好きで教員になったので、おそらくIBでなくても数学を教えることは楽しめるタイプだと思います。しかし、教員によっては戸惑う方もいらっしゃるかもしれません。その理由として、IBの教員はクリエイティブな能力が必要とされるからです。MYPでは真正な評価課題（知識の再現ではなく、真の理解をはかれるパフォーマンス課題）をデザインする必要があります。自分でアンテナを張って考えて、足場を作っていかなければいけません。答えのない問いを作るマニュアルはないので、自分自身の生活の中で自然とそういう問いを立て、教科と結び付けられる人がIBに向いていると思っています。そして私がIBの教員になってとても変わったと思う点ですが、「最終的にどんな子供を育てたいか」ということを常に考えるようになったことです。IBのミッションステートメントは達成すべき目的ははっきりしているので、ゴールを先に立てて逆向きに設計していきます。境界線を取り払い、いかに子供のために考えられるかが大切だと思います。

